
光 -ひかり-

美波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光 - ひかり -

【Nコード】

N1203Y

【作者名】

美波

【あらすじ】

ほとんど周りの友人たちは結婚して家庭を持って出産していく。気がつけば、28歳になっていた。

気がついたら、わたしは一人ぼっちになっていた。そんな気がした。奥手な主人公、秋元心あきもと こころの天然ラブストーリー。

自サイトより改稿移植中です。完了後、続きをこちらで投稿します。

第1話 心

空を見上げた途端に降り出した雨がわたしの頬に落ちた。

分厚い雲に覆われた空から次第に増える雨の粒が、

自分に目がけて降ってくるようで堪らなくなって頭を下げた。俯いた。

あの日は午後からは雨の予報だった。

すれ違う人々は手持ちの傘やバッグの中から折り畳の傘を取り出す。

街が一気に様々な模様と色の傘でカラフルになった。

わたしの瞳には、雨に濡れて次第に黒くなるアスファルトの色、一色だけだったけど。

【 光 - ひかり - 第一章 雨空の出会い 】

「うわ、写メで見るより大きくなったねえ」

休日を使って、車で一時間ほどかけて学生時代の友人の麻衣子^{まいこ}の宅へ遊びに来ていた。

結婚して二年目の麻衣子は半年前に母親になり今ではすっかりお母さんの顔だ。

「あ。あんまり大きな声出したら起きちゃうかな？」
「大丈夫、大丈夫。一度寝たらなかなか起きないから」

初対面の赤ちゃんはわたしが麻衣子の家に着く頃にはちょうど眠
っていて、

その可愛い顔を見ることは出来なかったけど、寝ている姿だけで
も十分可愛くて癒される。

ベビーベッドの置かれたリビングで、

わたしが手土産にと持ってきたお菓子と麻衣子が用意してくれた
紅茶をいただくことにした。

「久しぶりだね？元気にしてた？あ、お祝い、ありがとね」

「うん。…結婚しちゃうと、なかなか会えないよね」

「わたしはいつ遊びに来てくれてもいいんだけど？」

「いやいや、やっぱ気遣っちゃうよ」

ティーカップを手に顔に近づけると、紅茶の葉のいい匂いが漂っ
てきた。

「心こころは、いい人見つかった？」

「まあ、分かっててそういう意地悪な質問するんだ？」

「だって、わたしの結婚式に出席する予定って、あとアンタだけな
んだけど？」

「ごめんねー行き遅れてて」

お互いにカップに口をつけて目を合わせると笑い合った。

「でもさ、まだ二十八歳だよ？みんな、結婚するの早いんだけど」

「わたしたち結構みんな早かったよね？平均二十五くらい？」

わたしたちと言うのは学生時代からずっと仲良くしていた友人たちで、

五人いたうち未だ未婚であるのはわたしたただ一人になってしまった。

「まあ、ボチボチ頑張るよ」

「好きな人は？」

「いないです」

「アテは？」

「ないです」

麻衣子は溜息を吐くと「そういえばさ」と言っただけ以上盛り上がりようのない話の話題を変えた。

麻衣子の旦那さんがお仕事から帰ってくるまでの数時間、久々にお互いの近況を報告し合っただけ、終始笑い合っただけの時間を過ごした。

帰宅し家に着く頃、日はすっかり傾いて綺麗な夕焼け空が広がっていた。

道沿いにある家の車庫を出ると、空に映える赤色が眩しくて手を額にあてて影を作る。

すると一台の車が目の前を通り過ぎ、やがて停まった。

そのままバックをすると、隣の家の中に入庫した。

わたしは眩しい夕陽の光に目を細めながら、その様子をじっと見つめていた。

「心！今帰り？」

「うん！友達の家、遊びに行っただけ」

車庫を出てきた男性は3歳年上の隣に住む幼馴染だ。

目と鼻の先の距離から笑顔で手を降っている。

可笑しくて、笑っちゃった。

昔から「心」ってわたしを呼ぶ時はいつも優しい輝くような明るい笑顔でほほ笑んでくれた。

「修ちゃんは、結婚式の打ち合わせ？」

気がつけば、友人たちの間で独身はわたしただ一人になってしまった。

そりゃあ、友人の結婚式に出席した時は決まって一時的に必ず、結婚したくなる。

でもいつも通りの日常が戻ってくると一気にその気持ちも薄れて行く。

いつもそうだった。

さつき麻衣子に嘔吐いちゃった。

一回だけじゃない、何度も何度もついてきた嘔だった。

好きな人はいるの。

ずっと好きだった人がいるの。

今は、その人を諦めようと必死になっているところなの。

だから。

今のわたしは結婚なんておろか、恋愛すら出来ないんだ。

第2話 幼馴染

佐橋 修司はわたしの隣に住む幼馴染だった。

歳も三つしか離れていないため小さい頃からよく一緒に遊んだ。お互いに一人っ子だったということもあって、兄妹のようにずっと仲良くしてきた。

「友達って、この間子供生んだ子？」

「そうそう！赤ちゃん、可愛かったよ。ずっと寝てたけどさ」

数えきれないほど訪れた修ちゃんの部屋には、ダンボールが積みれ物が減り、ここに来る度に姿を変えた。

三か月後に迫った結婚式を前に、家を出て婚約者と一緒に二人で新しいお家に住むらしい。

「今、いろいろな準備で大変でしょ」

「そうだな」引越しの準備はだいぶ終わったけど」

修ちゃんは「散らかっててごめんな」と言うと台所から持ってきたお菓子の袋の封を開けた。

「食う？」と言ってスナック菓子の袋を差しだされたけど、夕飯前だったから断った。

「ねえ、結婚式の打ち合わせどうだった？」

「うーん……今日はお互いのプロフィールについて色々聞かれた」

「披露宴で司会者が使うやつ？」

「そうそう」

修ちゃんは思い出し笑いをすると「聞いてよ、加奈の奴さ」と言

った。

婚約者の名前も人物もずっと前から、結婚が決まった1年も前から知っているから今更動揺なんてしたりしない。

「アイツさ、知らなかったんだけど。出会った頃から俺のこと好きだったんだって。学生の頃だから……十年以上前だぜ？」

「あはは！ ノロケ〜？ やだやだ！ やめてくださーい」

「いいじゃん、付き合えよ。あとちよつとなんだから」

「あとちよつと」の言葉には、さすがに寂しさを感じる。

こんな風に一緒に過ごして笑い合える時間もあと少しだから。

「でもさ、たった十年前でしょ？ わたしは十年以上も前から修ちゃんのこと好きだったけど？」

「確かに？ おまえ子供の頃から俺のこと好きだったもんね？」

「あ、ちよつと間違えた。昔の話だよ？ 今は好きじゃないもんね」

「はいはい」

ほらね。

本気になんてしてもらえない。

今更もう、想いを伝えることすら叶わない。

膝に置いた手が、無意識に衣服をぎゅっと握りしめた。

子供の頃の夢はケーキ屋さんだった。

不器用でお菓子作りすらまともに出来ない今はただのOLだ。

アイドルに憧れて歌手になろうとオシャレに目覚めてマセてた小学生時代。

わたしは、努力だけではどうにもならないほど救いようのない才

ンチだった。

テレビドラマの熱血教師に憧れて先生になりたいと思ったのは高校生の時。

一生懸命勉強したけど大学受験に失敗して、夢に見るだけで終わった。

なんとなく海外の生活に憧れて留学したいなって思ったのは短大生の時。

でも両親に「おまえはジャパニーズだ」とわけの分からない反対をされて叶わなかった。

何よりずっと想い続けてきたこと。

初恋の人のお嫁さんになれたらなって絶えずずっと想い続けてきたことだった。

それも、一年前に叶わない夢だつてことを知った。

二十八歳にして遅すぎたけど、知った。

報われない、叶わない想いなんて全部は挙げられないほどにたくさんある。

諦めることには慣れている。

修ちゃんの家を出た頃、真っ赤だった夕焼け空は色を変えていた。暗闇の中に大きく浮かぶ月とポツポツと小さく光る星が映える夜空に変わっていた。

修ちゃんの家玄関から歩いて三十秒。

自宅の門の前に立って修ちゃんの家の方を振り返った。

こんなにも近いのに、ものすごく遠い。

「きょうは早く寝よう」と！

明日からはまたいつも通り仕事だ。

お茶当番だったから明日は少し早起しなくちゃ。

第3話 ドラマのような出会いが

「秋元さん！ おはようございます」

お茶当番だったわたしはいつもより早めに出社して、給湯室でやかんにお湯を沸かしお茶を作っていた。

そこへやってきたのは四歳年下の後輩の女性社員だった。

茶色に染めた短い髪がとてもよく似合う明るい子だ。

「大橋さん、おはよう」

「いきなりなお願いなんですけど……」

「うーん、難しいかも」

「まだ何も言ってませんよ！」

目を合わせて笑い合うと大橋さんが「週末、暇ですか」と言った。

「予定は特にないけど……いつもないよね、わたし」

「知ってまーす」

「言っね〜？」

大橋さんは再び明るくほほ笑むとわたしと距離を縮めて少し小声になった。

「合コン、どうですか」

「ああ〜」

「この間は本当にごめんなさい！失礼なことしちゃって……」

「あ、ううん。それは全然いいんだけど」

この間のこと、とは。

大橋さんに誘われて彼女のプライベートの友人が主催する合コンに参加した時のことだった。

女性陣は全員まだ肌に張り艶のあるわたしよりうんと若い子たちばかり。

男性陣も、全員わたしより年下だった。

わたしは盛り上げ役に徹していた。

大橋さんはこの事実を知らなかったらしく、「ちゃんと確認してくてごめんなさい」と何度も謝ってくれた。

別に、いいのに。

若い人たちに囲まれて楽しかった。

「今回は、ばつちり男性陣は全員三十代です」

「もしかしてこの間のことに気にかけてくれてるなら別にいいんだよ？」

「そんなんじゃないです。本当に偶然また別の友達から誘われて」

「わたしじゃなくて他の子誘ってみてもいいんじゃないかな」

「……みんな彼氏、旦那さん、もしくは好きな人いますよ？」

「……そうだったね」

大橋さんの誘いを断る理由が見つからず、OKの返事をした。

わたしの勤める小さな会社には女性社員は十名ほどしかいない。

わたしより年上の社員二人は既婚者だ。

気がつけば独身女の最長老だ、わたしは。

だからみんな気を遣ってくるのか、よく出会いの場には誘ってくれる。

感謝、しないよね。

会社帰りに友人の麻衣子から着信が入った。

昨日、お家にお邪魔した際にトイレにハンカチを忘れたらしい。
そんな連絡だった。

ついでにちよつと会話をしてみた。

「ねえ、今度さ。合コンに誘われたんだけどさ」

『最近めずらしく頑張るね？この間も行ってたよね、いつも収穫ないけど』

「わたし何が足りないと思う？」

麻衣子は『うーん、そうだな』と呟いている。

『心さ、好きな芸能人は？』

「え？花菱遼太郎だけど」

『そうだよね。……その人、わたしたちのお母さん世代だよ』

はなびしりょうたろう

花菱遼太郎は時代劇の脇役を中心に活躍する五十代後半の役者だ。
クールで落ち着いていて、包容力がありそうで何より醸し出す雰
囲気が渋くて格好いい。

……自分の好きな人とはあまり共通点がないけれど、好きだ。

その後、最近流行りのアイドルグループの名前を言ってみろ、と
言われグループ名までは出たけど、メンバーの名前はおるか、何人
のグループかも分からなかった。

最近観たドラマは？と問われすぐには思い出せなくて、
ふと思い出した十年以上前に夢中になった学園青春ドラマをあげ
たら麻衣子は携帯の向こうでしばらく無言になった。

『会話だと思っ』

「会話？」

『あんだと会話しても初対面の人間は盛り上がらないかも』

言われてみれば、初対面の人間と接する際、高い確率で仕事かテレビ、もしくは芸能関係の話題が出る。

高い確率で好きな芸能人は、と若い人に聞かれた時、花菱さんと答えると「何してる人？」と聞き返される。

「な、なるほど……」

麻衣子は『いい報告、待ってるね？ 頑張れ』と言って電話を切った。

どうして、今まで誰も指摘してくれなかったんだろう。

この日、わたしは家に帰り夕飯を食べて早々にお風呂を済ませた。リビングのテレビを珍しく占領して観るのは月曜日九時のドラマ。幸運にも、今日が初回放送だった。

主人公は、失恋して失意のどん底にいる小柄な可愛い女性だった。

ある日偶然立ち寄ったオヤジ臭い定食屋さんで、ヤケになって大盛りのチャレンジメニューにチャレンジするんだ。

同じく、同じ日に同じ場所で同じチャレンジメニューに挑戦しようとする青年が隣に並ぶ。

お互いに負けるもんかと闘志を燃やす。

おそらくこのドラマのメイン二人の、出会いだ。

おそらく今後お互いに愛し合うようになるメイン二人の、運命の出会いだ。

不覚にも、感動してしまいました。

まだ何も始まっていないのに。

ただ出会っただけで泣きそうになった視聴者はきっと、わたしだけだと思う。

だって、この物語の結末はハッピーエンドでしょ？

自分と重なった主人公に幸せになれる結末が待っているんだって思ったら、

気が早すぎるけど感動してしまった。

馬鹿みたいだけど、少しだけ涙が出た。

わたしにも、こんな運命の出会いがあるのかな。

第4話 合コンへ

週末の金曜日の合コンまで、短い期間だったけど勉強はした。

ドラマ、バラエティー、クイズ番組。

普段はテレビより読書をして過ごすことの多いわたしが、普段見ないようなテレビ番組をこの数日間仕事から家に帰ってからはずっと観ていた。

今人気のある若い俳優やお笑い芸人の名前と顔は覚えた。

雑誌も読んだ。

昔は愛読していたけどこのところ読んでいなかったファッション誌から、タウン情報誌まで。

映画はさすがに観には行けなかったけど、観たいと思う映画はいくつか見つけた。

昨日も麻衣子から電話がかかってきて少しだけ会話をした。

別に彼氏を見つけに行こうとしなくていいんだって。

わたしはまず色んな男性を見て接して、まずはまともな会話が出るようになるなさい、と言われた。

……まるで、わたしがまともな会話ができないような言い方だ。ただちよつとだけ、最近の話題に疎いだけだ。

大橋さんの言う通りこの日の合コンは全員男性陣は三十代だった。オシャレな居酒屋の個室は男女が八人座るには少しだけ狭くて居心地は正直よくなかった。

最初はなかなか盛り上がらなかったけど、次第にお酒が入りだすと周りの場の雰囲気盛り上がってくる。

わたしはまったくお酒が飲めなかったため、その盛り上がる雰囲気だけをたたいつも眺めているだけだった。

酔って陽気になった人に絡まれると雰囲気酔った振りをして一緒に盛って盛り上がっているけど、
本当はいつも、少しだけ無理をしていた。

わたしの隣の席に座ったのはたぶん、この中で一番年上で…一番、体格のいい身体の大きな人だった。

真面目そうで、雰囲気からインテリな感じがして頭の良さそうな人だった。

彼はビールを飲んでいるようだったが、あんまり減っていない。
あまり飲まない人なんだって思ったから少しだけ親近感が沸いた。

彼はいきなりぶしつけな質問をわたしに投げかけてきた。

「彼氏いないの？」

「はい」

「どれくらい？」

「ずっとですけど」

「ずっとって。三年くらい？」

「ずっとは……ずっとですけど」

「結構な期間、いないってこと？ 恥ずかしがらなくてもいいのに」

ずっとなんて言ったら、生まれてこの方いないってことなんだけど

……

うまく伝わらなかったみたいだ。

隣に座る彼の強めの視線を感じて目を合わせた。

「でも君、サクラさんに似てる」

「さ、さくらさん!？」

「知らないの？胸どき（星）トライアングルのサクラさん」

「そ、それって」

「今大人気のアニメだよ」

ア、アニメ!？

しまった、盲点だった。

最近のアニメ事情については勉強していない。

この後のわたしは必死に最近観て覚えたドラマの話で盛り返そうとしたけれど、「ドラマには興味がない」って。

あの最新映画観てみたいになって言ったら「僕レンタル派」と言われてしまった……。

アニメについての勉強を怠った自分が悪いのか、

それともただ単にこの日の運が悪かったのかはわからないけど、今日の合コンは大失敗に終わった。

唯一の収穫は、胸どき（星）トライアングルというアニメについて、詳しくなれたことくらいかな。

今日のことを麻衣子に報告したら「他人だったら笑うところだけどわたしは笑えない」と言われた。

わたしだって笑わすつもりはないし、笑えないよ。

やっぱりわたしは、結婚どころか恋愛にも、うつん、それ以前の話。

出会いにも縁がないみたい。

第5話 暗い空とわたし

合コンの翌日の土曜日。

予定もなく家でゴロゴロしていると、玄関から母親がわたしを呼ぶ声が聞こえてきた。

行ってみると修ちゃんの姿があった。

自分の部屋へと案内すると、ドサリと大きな音を立てて手に持っていた紙袋を床に下ろした。

「どうしたの？急に」

「これ、一緒に見ようと思って」

そう言っただけで彼が床に広げたのはわたしたちの子供の頃の写真だった。

「部屋片付けてたら一番最後に出てきた」

「うわぁ、懐かしい」

手に取って昔の写真を眺めていると昔の記憶が蘇ってきて、懐かしく楽しいけどちょっと切り切ない気持ちになった。

アルバムを手に一ページずつゆっくりとめくりながら、昨日の合コンの話をしてみた。

「昨日さ、合コン行ったんだ」

「マジでか。変な奴にひっかかりたりしてないだろうな」

「なんか、サクラさんに似てるって言われた」

「さくら？」

「胸どきトライアングルっていうアニメのキャラクターらしいんだけど……知ってる？」

「いや」

「胸どきとトライアングルの間の（星）は忘れちゃダメだって……」

「……は？」

「ちなみにサクラさんは脇役だけどなかなかの人気キャラで……」

「もういい」

修ちゃんは額に手をあてて深いため息を吐いたけどすぐに立てなおすと「変なのには気をつけろよ」と言っただ。

「変なのつて。何？ 心配してくれるの？」

「そりゃあ、心は妹みたいなもんだし」

「ほおゝ妹、か」

大丈夫だよ。

こんなのもう、慣れてるから。

だから、傷つくの分かってるけどもうちょっと質問、してみようかな。

「一度もさ、わたしのこと女として意識したことない？」

「どうした、急に」

「ほら。わたしって結構、セクシーでしょ？ このうなじあたりが

……」

「あはは！ 何見せてんだよ！ ないない、それは、ない」

「……笑いすぎ」

「妹を意識するなんて、ありえないだろ？」

「だよね」

大丈夫だよ。

こんなの全然、大丈夫。

修ちゃんが帰った後、わたしも外へ出た。
ただ目的もなく街をブラブラと歩いてみた。

駅前に辿り着くと急に街の色が変わった。

人の数が増え、華やかになった。

オシャレをして歩く人々の色々な色が重なって耳に届くたくさんの声が賑やかだ。

しまった。

ものすごい地味な普段着姿で、気づいたらここまで歩いてきてしまった。

わたしを見ている人なんて誰もいないのに。

ひどくこの街の景色に浮いているような気がしてきて恥ずかしくなった。

自然と歩く足が止まると、無意識に空を見上げた。

こんな気持ちの時はスカッと晴れた快晴の空を拝みたいところだったけど、あいにくどんよりと曇っている。

自分の今の気持ち、広い空に表れているみたいだった。

ポツリと一粒の水滴が自分の頬に落ちた。

一粒、二粒と。

わたしの頬を濡らしていく。

そうだ、今日の天気予報は午後からは雨の予報だった。

街は、今度は街行く人々が差す傘の色と模様でカラフルな色で彩られた。

傘を持たないわたしはやっぱり、この地に一人、浮いているよう

な気がした。

俯いたら次第に増えてくる雨の粒がアルファルトを濡らし色を変え、次第に真っ黒な色になった。

どんよりと空は曇って視界は真っ黒で、なんだか今のわたしの心の中みたい。

「濡れちゃいますよ？」

背後からかけられた声と同時に、真っ黒な視界に鮮やかなブルーの色が混じった。

わたしの大好きな真っ青な空と同じ色をした傘が、わたしを覆うように影を作った。

第6話 心に差し込む光

わたしの肌を濡らした雨を遮るブルーの傘の持ち主は、
わたしをその傘の中へと入れるとわたしの表情を伺うようにもう
一度控えめに声を発した。

「風邪、引いちゃいますよ？」

「……あつ」

男性の言葉に肩を僅かに震わせて、自分の髪に手で触れるとしつ
とりと湿っていた。

この日着ていた地味な色の服も、水分を吸ってさらに暗く地味な
色へと変化していた。

彼を見上げて瞳を合わせると彼が少しだけ困惑した瞳でわたしを
見ていた。

「ご、ごめんなさい！-」

「いいえ。雨、急に降ってきましたもんね」

「傘、持っていないんですね？」

「あ、はい……」

手ぶらで肩から斜めに提げた小さめの肩掛けのカバンには、お財
布とハンカチ、自宅の鍵と携帯しか入っていない。

傘を持っていないことは一目了然だった。

「あの、どこか屋根のあるところまで一緒に歩きませんか？」

「あ、いいです。わたしの家ここから歩いて帰れる距離なんで。走

ります」

彼が差し伸べてくれた傘から抜け出そうと一歩下がると、彼の腕が僅かに伸びてわたしをまだ雨から守った。

目の前の彼の肩が濡れるが見えて一歩再び前に出た。
休日で賑わうこの景色の中で彼はスーツ姿だった。

「よかつたら、この傘使いますか？」

「え？」

「この傘会社の置き傘で、僕今日折り畳み傘持ってますから」

彼は傘を持つ手とは反対側の手に持つ通勤カバンを持ち上げて微かに目元に笑みを浮かべた。

「そんな、悪いです！ 大丈夫ですから」

「別にあの、安物なんで……。僕よく外回り中傘忘れて買うから会社に置き傘がたくさんあるんです」

今度は白い歯を僅かに見せて恥ずかしそうに少し俯きながらほほ笑んだ。

ほほ笑みながら差しだされた傘の持ち手に自然に手が伸びてしまった。

普段だったらこのような他人からの好意には、
気持ちだけを受け取ってたぶんわたしは逃げるようにしてこの場を去ったことだと思う。

初対面の他人から、こんな好意を受けたことがなかったから実際のことはわかんないけど。

彼から受け取った傘を今度はわたしが持ち、さらに雨足の強くなる雨から二人を守る。

一人で使う小さめの傘だったから、その中に二人が入ったらどうしても雨には濡れてしまう。

わたしは出来るだけ彼をかばうようにして腕を伸ばして彼の方へと向けて差した。

彼はカバンの中から手探りで折り畳みを取り出すとわたしの方を見ながら「ごめんなさい、すぐ出るんで」と言っている。

彼の方へと傘を差し出しているからわたしが濡れていることに気を遣っているらしい。

謝るのはわたしの方なのに。

「その傘……」

「あ、あぁっ。こ、これは……」

男性がカバンから取り出しひろげた折り畳み傘は、うさぎのキャラクターのとても可愛い女の子らしい小さな傘だった。

「これは、その。姉の子供の傘だ」

「はぁ……」

「今日、急遽出勤が決まって慌てて出てきたから……」

「そ、そうですか、おつかれさまです！」

「……」

「……」

しばらくお互いに俯いて沈黙が続いた。
先に顔を上げたのはわたしの方だった。

「あの、やっぱり傘……」

「いいんです、いいんです僕はこれで」

せめて今私が差しているブルーの傘と交換しませんかと提案しようかと思った。

でも借りておいてそんなこと言うのも失礼にあたるかと思ったし、折り畳みがお姉さんの子供のものならなおさらそんなこと言えなかった。

彼は小さな傘を差してわたしの差す傘の中から抜け出した。

「じゃあ、僕はこれで」

「あの、本当にいいんですか!？」

去ろうとした彼を一度引きとめると目を思いつきり細めて穏やかにほほ笑んだ。

「風邪、引かないようにしてください」

彼のその笑顔は。

どんよりとした暗く厚い雲に覆われたこの空の下でも明るく輝いているように見えた。

「ありがとうございます!」と深々と頭を下げ、次に顔を上げた時には彼はたくさんの人が街行く景色の中に消えていた。

しばらくその場に立ちつくしていると、次第に傘に落ちる雨の音が耳に響いてきた。

俯いて、雨に濡れて真っ黒に光るアスファルトを見たらまた急に

気持ちが悪くなってきた。

急に肩が震えて寒さを感じた。

結構、濡れちゃったからな。

冷たくて切ない感覚を忘れさせるような力が彼の笑顔にはあったんだ。

まるで闇に覆われた暗いわたしの心の中に、小さくて儚くて、でも優しくて穏やかな光が差し込んだみたい。

あんなにも鮮やかに瞳に映ったブルーの傘は、
改めてよく見てみると百円ショップで購入できるような安っぽい、
ビニール傘だった。

それでも。

雨に打たれて身体は冷えてしまったけど、傘の持ち手だけがなんだかあったかい。

【光 - ひかり - 第一章 終】

第7話 婚約者

はじめて結婚式に出席したのは二十二歳の時だった。
出来ちゃった結婚をした同い年の友人の式だった。

彼女の子供は今はもう六歳。
来年小学校に入学する。

あの日は夕焼け空の下、
赤く染まった公園でベンチに一人で座って、元気に遊ぶ子供たち
を見ながらそんなことを思い浮かべていた。

秋の夕焼け空は一年の中でも特別綺麗だなと個人的に思う。

でも鮮やかに真っ赤に染まる空を見ながら秋を感じて、
澄んだ乾いた空気が肌を撫でもうすぐ冬なんだと思ったら、なん
だか物悲しい気持ちになった。

【 光 - ひかり - 第二章 夕陽の下で 】

わたしの務める小さな会社には食堂なんて立派なものはない。
会社のまわりにランチを楽しめるオシャレなカフェもない。
だから女性社員に限らずお昼ご飯を持参して、社内で食事を済ま
せる人が多かった。

わたしは後輩と一緒に、ほとんど使われることのない最上階の小さな会議室で母親が毎日作ってくれるお弁当を食べる。
最上階といっても、三階だけだ。

この日はお昼になって会議室に行ってみると、大橋さんと彼女と同期の山岸さんが楽しそうに会話をして盛り上がっていた。

「あ、秋元さん！」

「なんか、盛り上がってるね？」

四角く並べられた長いテーブルに並んで座る彼女たちと向かい合うように座った。

「聞いてください！山岸さん、彼氏できたんだって！」

「えーっ！そうなの！？もしかして……前話してたずっと好きだった人！？」

山岸さんは少しだけ頬を赤くして頷いた。

大橋さんと違って大人しくて気弱な彼女は、長い間片思いしている人がいるけど想いを伝えることができないってずっと悩んでいた。

「よかったねえ！！ えっっそっかあ……うん、よかったね！！

よかったねえ！！」

何度もよかったねと繰り返すわたしに照れながらも何度も何度も彼女は頷いた。

幸せそう。

なぜ自分が頬を緩めているのだろう、笑っちゃうね。でも、嬉しいから。

「秋元さん！ わたしたち負けてられませんよ！」

「そうだよねえ……」

「この前の合コン、そういえばどうでした？」

「うーん。残念ながら」

「一緒ですう……なんか隣にいた人にマニアックな会話されちゃって」

「一緒だ、って思った。」

でもそのマニアックな会話の中身について聞く隙もなく、大橋さんは「秋元さんはぬけがけはナシですからね！」と言ってコンビ二で買ったであろう菓子パンを大きな口を開けて頬張った。

「山岸さんは、どうやって好きだった彼と付き合うことになったの？」

「なんか……わたしが好きだって知ってたみたいで、彼の方から「態度で伝わっちゃったってやつ？」」

「たぶん……」

「どうやったら伝わるのかな？」

「わ、わからないですけど……」

わたしは「あ、ごめん。変なこと聞いて」と言ってお弁当をテーブルの上に広げた。

今更そんなこと知ったって、わたしにはもう遅いよね。

自宅から会社までの距離は電車に乗って二十分ほどだった。
徒歩の時間を入れても一時間見れば十分だった。

午後五時半の定時で上がる頃にはもう辺りは薄暗くなって、自宅に着く頃には真っ暗になっていた。

自宅の前に着くと隣の家から「お邪魔しました」と言う女性の声が聞こえてきた。

その方向に目を向けて少しすると家から出てきた女性と目が合った。

暗くてもお互いの家の門に設置された街灯がお互いの顔を照らしてそれが誰かってことはすぐに分かった。

「心ちゃん！ 今、帰り？」

「はい。加奈さんは？」

「わたし？ わたしはちょっと彼のお母さんに用事があって」

「修ちゃんはまだ帰ってないんですか？」

「うん。ああ、いいの。修司には今日は用事ないし」

修ちゃんの婚約者の加奈さんはわたしより一っ年上だけど、修ちゃんよりもずっとしっかりしていて、結婚前なのにすでに修ちゃんを尻に敷いている。

でも、そんな二人はいつも楽しそう。

「わたし、二次会行くんで。楽しみにしてます」

「ありがとう！ ゲームの景品、いっぱい用意するから、がんばってね！！」

「はい！」

加奈さんは笑顔を見せると「じゃあ」と言って背を向けた。

「あ。歩きですか？」

声をかけ引きとめると、加奈さんは振り返って「うん」と言った。駅までは歩いて十五分ほどかかる。

「よかつたら、駅までですけど送りましょうか」

「でも……今帰ったばかりでしょ。疲れてるでしょ」

「いいえ。仕事、暇なんで」

わたしが笑顔を見せると加奈さんは「じゃあ、お言葉に甘えちゃおうかな」と言っただけこちらに向かって歩いてくる。

綺麗な長い髪がサラサラと風になびいてとても綺麗だった。

なんとなく彼女の真似をして髪を伸ばしてみたけど。

わたしの髪はいつも毛先が片方だけハネて、

同じように伸ばしても加奈さんのように風にサラサラとなびく綺麗な髪とは大違いだった。

「今日のお礼はケーキでいいですよ」

「修司に言っておくね」

「あはは」

一緒に自宅の車庫にある車に乗り込むと駅まで加奈さんを送るために車を発進させた。

決めた。

今週の休みの日に、髪を切ろう。

これから冬になる。

シヨートだと首元が寒いから肩くらいの長さにしようかな。

あ、でも。そんな中途半端な長さにしたら、もっと髪がハネちゃうか。

第8話 好きなタイプは？

「心ちゃんは、いい人いないの？」

ちょうど赤信号で停車している時だった。

助手席に座る加奈さんが窓から外を眺めながら口にした質問だった。

「いい人、うーん……」

「会社は？」

「いいなっと思う人ってだいたい結婚してません？」

「心ちゃんオヤジ趣味だもんね」

「オヤジって！」

「花菱なんとかさん、だっけ？」

加奈さんはわたしをからかうように手を口にあててクスクスと笑っている。

「彼は憧れなだけであって実際好きになる人は違いますよ」

「えー？ どんな人が好きなの？」

「どんな人と言われても……」

返答に困っていると赤信号が青に変わって車を発進させた。

「もしよかったらただけどさ、誰か紹介しようか？」

「紹介？」

「うん。ずっと思ってたんだけど修司がさ、うるさいんだよね」

「修ちゃんが？」

「なんか注文が多くて」

「注文？」

「こういう奴はダメだ、とか。心にはこういう奴がいい、とか」

「……そうなんですか」

加奈さんの「お兄ちゃん気取りもいい加減にしろって感じだよ」と言っ
てこちらを向いている視線を感じた。

このあと、加奈さんに事細かに好きな男性のタイプについて聞か
れた。

好きなタイプって言葉にして伝えるのは難しい。

手っ取り早く伝える方法として好きな人をあげるのが一番なんだ
ろうけど、それは出来ない。

もしくは芸能人をあげるのが一番簡単なんだけど、わたしの好き
な芸能人は……。

結局、辿りつく答えはあの時代劇脇役俳優だった。

彼は好きだけど……実際に、彼と年代の人を紹介されても困る。
若くても、彼のような渋い空気を醸し出されてもどうしたらいい
のか分からない。

加奈さんは最初は困った様子だったけど「任せて！」と言って自
信満々な感じでわたしの肩を叩いた。

……大丈夫だろうか。

加奈さんを駅まで送り届け、自宅に戻って夕飯の前に部屋へ荷物
を置きに行った。

少しだけ勢いよく部屋の扉を開けたら、何かが音を立てて倒れる
音がして部屋の明かりをつけた。

部屋を見渡すと、本棚の横に立てかけておいたブルーの傘が倒れていた。

玄関に置いておくと家族に使われてしまいそうだから自分の部屋に持ってきておいた。

返す約束もしていないし、第一これから先会える可能性もほぼゼロに等しい人だけど、借りものには違いがないと思って。

この傘を見ると雨に濡れて寒く冷たいあの雨の日の事よりも、優しくあつたかい笑顔を思い出す。

「しまったな……」

加奈さんに、こう伝えればよかった。

冷えた心を瞬時に温めるような、そんなあつたかい笑顔を持っている人が好きですって。

第9話 小さな勇気

加奈さんから連絡が入ったのは、一週間後のことだった。

仕事が終わってロッカーに行き、携帯を見ると一件の不在着信とメールが届いていた。

メールの内容は「今夜、時間あるかな？」というものだった。

わたしは服を着替えて会社を出るとすぐに加奈さんに電話をした。

『心ちゃん、ごめんね〜今いい？お仕事終わった？』

「はい、どうしたんですか？」

『この間さ、誰か紹介しよっかって話してたよね？』

「はい」

『ちょうど今、さつき偶然学生時代の同級生にばったり会ってさ一緒に飲んでるの！ どう？』

「ど、どうって……」

『あ、ちなみに彼ね修司も知ってる人だから安心だよ』

安心して……。

そんなことよりも、急過ぎるよ。

視線を下ろし、自分の服装を見る。

制服がある会社だからと怠けて、地味な色とデザインの洋服を着ている。

自分には、お似合だけど。

「あー、心の準備が……」

加奈さんはすこしの間を置いて「あぁっ、違う違う！ 別にお見合いさせようってわけじゃないって！ 三人で一緒に飲もう？」と

言った。

更に「心ちゃんのタイプの男の人じゃないし！」とも。

それでもまだはつきりしない態度のわたしに加奈さんは、

「心ちゃんも男の人のお友達、いないでしょ？ 友達作る気持ちで

軽い気持ちでおいでよ」と再び優しく言った。

そう言ってもらえると、少し気が楽になった。

誘われれば気軽に行ける合コンと、知人からの紹介では同じ出会いの場でも全然重みが違うようでなんだか戸惑う。

別に、軽い出会いをしたいわけではないのだけど。

何がしたいんだろう。

どうしたいんだろう。

こんなんだから、だめなのかなわたし。

本気で、恋愛する気あるのかな。

落ちる気持ちを振り払うように頭を一度だけ軽く振ると、加奈さんが待つお店へと向かった。

会社帰りのサラリーマンで賑わう、明るい雰囲気居酒屋だった。入口から一番奥の隅の掘りごたつのある席に加奈さんと加奈さんの友人は二人でいた。

「ごめんなさい！ 遅くなって」

「いいのいいの、こっちこそ急にごめん。ほら、座って」

靴を脱ぎ、手前に座っていた加奈さんが奥へ行き空いた加奈さんの隣に座る。

目の前に座る男性を前に目を合わせて声を揃えて「はじめまして」

と言った。

お互いに、笑顔だった。

第一印象だけで人を判断するわけではないけれど、一目見てとても雰囲気明るくていい人そうだなと思った。

目を合わせた時、笑ってくれる人ってやっぱりいいなと思った。

「彼女が……さっき話してた心ちゃん？」

「うん、何で？」

「いや、なんか話のイメージと違って」

加奈さんとの会話の途中で男性は「あ、失礼な意味じゃないからね」と言っただけを見た。

「どういう話を聞いたんですか？」と言って二人を交互に見る。

「おっとりして、ちょっと天然入ってる子って聞いてただけど……」

……

「えっ！ 加奈さん、本当？」

「うん！ よくさ、修司ともそう話してるよ？」

「……それって、褒めてるんですか？」

「褒めてるよ、可愛いつてことじゃん」

「顔が嘘っぽい」

「あははっ」

案外、自分が他人からどう思われているかなんて知らないもんなんだ……。

「で、実際に試してみてどうなの？」

加奈さんの問いかけに男性は「大人しい子だっと思いきんでたか

ら明るくてちよつと意外だった」と言つて
飲み物のメニューを手にすると「何頼む？」と言つてメニューを
差し出した。

初対面の人の前で一杯目からウーロン茶を頼むのもよくないと思
つてお酒のメニューを眺めていた。

甘めのカクテルがいいかな。

アルコール度数がついているけど、結局人間が手で作るお酒だか
らあんまり信用できない。

「心ちゃん、無理しなくていいよ？」

「あ、でも」

お酒が苦手だと知る加奈さんの言葉に反応した男性の「飲めない
の？」との問いかけに小さく頷いた。

「そうなんだ、無理しなくていいよ。女の子は飲めなくても断つて
もいいと思う」

「はあ？ わたしには飲め飲めつて言つて飲ませるよね？」

「飲め飲めつて言つて飲ませてくるのはそっちだろ？」

「聞こえませーん」

二人のやり取りに「あはは」と声をあげて笑ってしまった。

仲が良さそう。

学生時代の同級生、か。

男性の友達なんてわたしには一人もいないから、この二人を見て
いるとちよつとうらやましいなつて思った。

「あ、心ちゃん。この謎の男はね」

「謎つて」

男性はビールジョッキ片手に加奈さんを睨むようにして見ている。

「早瀬 彰浩^{はやせ あきひろ}。大学時代の同級生なの。だから心ちゃんより一上年上だね？お互いに修司の後輩なんだよ」

「心ちゃんって、あ、勝手に心ちゃんって呼んじゃってるけど」

「あ、いいですよ？」

「佐橋さんとういう関係なの？」

「幼馴染です。家が、隣なんです」

「えっすごい！ほんとに。へえ、いいね、なんか歳が近い者同士が家が隣同士って」

早瀬さんはわたしの事を明るいつて言っただけ、比べ物にならない程に明るくてよく話す人だった。

早瀬さんが「なんか家が隣同士で幼馴染って設定、よくありそうだよな」と加奈さんに振ると「何の設定！？」と冷たくあしらわれてしまった。

加奈さんは「なんかごめんねー馬鹿な奴で。酔ってるみたい。シラフでも変わないけどね？」と言って私の肩に手を置いた。
わたしは笑顔で首を横に振った。

今日はとても楽しかった。

久しぶりに、お酒の席が楽しかった。

この日から早瀬さんとメールのやり取りがはじまった。
だいたい一日に一回。

色気も何もないたわいもない内容のメールのやり取りだったけど、楽しかった。

その日たまたまあった出来事や仕事でのことを一日の終わりに面

白可笑しく脚色して報告してくる。

わたしも彼以上に面白い内容のメールを作ろうと頑張って、メール一通作るのに最大一時間かかったこともある。

でも、わたしの平凡な日常ではそれは難しかった。

いくら頑張っても「今日もいつも通り平和でした」としか思い浮かばなかった。

数日後、早瀬さんから週末のお休みに「メールばっかじゃなんだしせつかくだから一度会ってみようか」と誘われた。

指定された日は、あいにく先週予約が取れなくて行きそびれた美容院の予約を入れていた。

それを伝えたら、「じゃあ夕方からにしょ、ご飯行こう!」と云ってくれた。

気を遣ってか「他に誰か誘おうか? 加奈と、あつ佐橋さんも誘ってもいいよ」と言ってくれたけど、大丈夫ですと答えた。

そんなのなんだか照れくさいし、修ちゃんが一緒の席にいるなんてのはやっぱりまだ複雑だ。

一回会っただけだけど加奈さんの友達だし、明るくていい人そうだった。

男の人と二人で会うなんていづりだろう。

「友達を作る……か」

わたしの仲が良い友人はもう全員結婚してしまった。

麻衣子はまずは色んな男性を見て接ししろと言った。

加奈さんも、まずは友達を作れと言った。

二十八歳にして、今更な事ばかりだけど今のわたしにはとても大
事なことなのかもしれない。

とりあえず週末、ちょっと緊張するけど頑張ろう。

楽しめたら、それでいい。

第10話 夕焼け空

早瀬さんとの約束の日、午前中は雨だった。

午後から美容院の予約をしていたわたしが家を出る頃は降っていた雨も止んで、秋の澄んだ青空が広がっていた。

いつもより服を選ぶ時間は長かった。

メイクの時間は、どうだろう。多少は長かったかも。

髪は今から切って綺麗にセットしてもらってから、

片側だけでも治らない寝癖がついて毛先がハネているけど気にしない、いつものことだし。

家を出て今日は晴れていたから徒歩で駅まで向かった。

いつも駅前にある同じ美容院の同じ美容師さんを予約時に指名する。

ずっと伸ばしていたからいつもおまかせで全体的に軽くしてもらったり、整えてもらったりするだけだった。

今日は一つ注文をしようと思う。

ずっと伸ばしてきたけど、久々に短くしようってそう決めてきた。

ちなみに、今更失恋したからって切るわけじゃないんだよ。

わたしの失恋なんてもう、ずっと前から分かっていたことなんだから。

ただ、もうマネをするのを止めようって思った。

どんなに憧れて羨ましくても、わたしは、その人にはなれない。

やっと分かったのかな。

あれ、結局髪を切る理由……失恋になるのかな、これって。

美容院が目前に迫った時、バッグの中の携帯が鳴った。
早瀬さんからの着信だった。

「もしもし？」

『心ちゃん！！ ごめん！！！！』

「うわあっ！ び、びっくりした…」

耳元にあてた携帯から急に大きな声が聞こえて驚いて声を上げてしまった。

なんでも。

午前中、洗車中に足を滑らせて乗っていた台から落ちて腰を強打して、今立つことが出来ないらしい。

ものすごくお気の毒な話だったけど……「大丈夫ですか」と心配をする声をかけながらもなんだかちよつと笑ってしまいそうになった。

「あー、わたしのことは、もうそんなの全然気にしないでください」

『今度は必ず今日の謝罪も意味も込めて…』

「フルコースでいいですよ？」

『何の！？』

「あはは！冗談です」

もう一度「お大事してください」と彼に告げ電話を切った。

何度も謝られてこっちがなんだか申し訳ない気持ちになってきた。
仕方ないよ、だって立てないんだもん。

「……ふう」

自然とため息が漏れた。

携帯を見ると美容院の予約の時間ぴつたりになっていた。

目前に見えている美容院まで小走りで走った。

午後三時に予約していた美容院はこの日とても混んでいて、カットするだけなのに、二時間もかかった。

今は毛先に重みのあるボブが流行りらしい。

美容師さんにそう説明され雑誌を見せてもらったら可愛いモデルの子が美容師さんの言うその髪型をしていた。

自分がこの髪型にしても、このモデルさんのようには決してなれないってことは分かってるのだけど。

分かってるんだけど……なんだかなれそうな気がして、いつも髪型を変える時は雑誌のモデルさんを見て、髪型を決める。

肩より少しだけ高い位置で切りそろえられた髪は、いつも片側だけハネていたけど今はちゃんと右も左も内巻になっている。

美容師さんも自然に内巻になるように切ったと言ってくれた。

いつもそう言うってくれるけど……これきつと明日になったら絶対に片側だけハネる。

でもさっぱりして、気分もなんだか変わった。

大人っぽくなった気がする。

……って、いい歳した大人が何言ってるんだか。

美容院を出ると、せっかく髪も綺麗にしてもらってるし、この後の予定がなくなって一人で買い物でもして帰ろうかと思った。

でも暮れ始める空を見たら暗くなる前に帰ろうってそう思って、家の方へと足を向けた。

家に向かう途中で通り道にある公園に差しかった時、元気に走り回る子供たちの声が聞こえてきた。

自分も昔、よくこの公園で遊んだっけ。

赤とんぼが舞う夕陽で赤く染まった公園を見て、なんだか懐かしい気持ちになった。

公園を外から覗いていると数組の親子が手をつないだり、母親がベビーカーを引いて公園から出て家へと帰って行く。

公園の中のベンチが空いたのを見て久しぶりに公園の中に入ってベンチに腰を下ろしてみた。

まだ数組残る母親と子供たち。

目の前にある砂場で遊ぶ子供たちはたぶん小学校入学前の五、六歳くらいかな。

そういえばと、大学の卒業を前に妊娠をして結婚をした友人がいることを思い出した。

ずっと会ってないし、時々子供の写真つきのメールが届くくらいの付き合いしか今はできていないけど、ふと彼女のことを思い出した。

毎日一緒に笑って楽しい学生生活を過ごしていた彼女がもう、あんなに大きな子供のお母さんなんだなって思ったら、少しだけ寂しくなった。

冷たい風が頬を撫でる。

秋の気候は昼間こそ過ごしやすい気候だけど、夕方になると急に冷える。

特に、髪を切って開いた首元に冷たい風が染みる。

空を見上げると真っ赤に鮮やかに染まった夕焼け空が広がって

て、
あんなにも空は暖かい色をしているのに、肌を撫でる風は冷たく
って、もうすぐ冬が来ると思ったらなんだか物悲しい気持ちになっ
た。

今日だって少しの勇気を出してみたけど、見事に不発だったし。
なんだか色々、うまくいかない。

俯くわたしの視界に、しゃがみ込んでわたしを見上げる無垢な瞳
が目に入った。

小さな、五歳くらいの女の子だった。

「こんにちはわ」

「こんにちはわ！」

わたしの挨拶に無邪気に元気な声を発して、瞳を目一杯にぎゅっ
と瞑って照れくさそうにして笑っている。

可愛い……。

もう恋愛も結婚もしなくていい、相手もいらないから子供だけ欲
しいな。

そんな危険な考えをしてしまうほどに、目の前に突然現れた女の
子は愛らしくて可愛かった。

「みずほ〜そろそろ帰るよ〜」

男性の声に反応して振り向くと、ちょうどその方向は夕陽の光が

男性を背中から照らして眩しくてよく見えなかった。

次第に近づく足音と、女の子の「まだあそびたい！」の声。

視界に入った男性の姿に、無意識のうちにわたしは腰を下ろしていたベンチから立ち上がっていた。

現れたのは、あの時と同じ笑顔だった。

「俺、そろそろ帰りたいんだけどな」と言って優しい笑顔で女の子の頭を撫でている。

わたしの視線を感じてか、こちらに振り向いて目を合わせた彼の口元が「あっ」と声を発つすることなく形だけを作った。

「お久しぶりです。あ、えっと……僕のこと、覚えてますか」

「はい、……覚えています」

少し嬉しそうに照れたようにほほ笑むその笑顔も、声も、優しい瞳も全部。

忘れるはずもない。

第11話 一番星

「あ、あの……お子さんですか？」

「えっ？ あっああ、この子ですか。子持ちに……見えます？」

「全然！ ごめんなさい！！ 失礼なこと言つて……」

彼は女の子と同じ目線になるようにしゃがむと「もうちょっとだけ遊んでいこっか」と言つた。

女の子は「うん！！！」と身体がそのまま前方へ向かつてでんぐり返ししてしまいそうになる勢いで頷くと、砂場目がけて走つて行った。

「あの子は、姉の子供です」

「あ、……お姉さんいるって言つてましたよね」

立ち上がりながら俯くようにしてほほ笑むと軽く頷いた。

彼は視線をベンチに向けると「座りませんか」と言つてわたしの顔を見た。……たぶん。

わたしは視線を合わせることが出来ないでいた。

ベンチの隅に座るとあとから彼が距離を取つて隣に座つた。

「この間は、ありがとうございました」

「いいえ。あの傘ボロくて。雨漏りしませんでしたか？」

「いえ！ すぐく、助かりました……！」

「そっか、よかったです」

会話が途切れると子供の無邪気な声と、風に揺れる木々の音が聞こえてきた。

「寒くなってきましたね」

「は、はい……過ごしやすい秋はあっという間に終わっちゃいますよね」

彼は空を見上げた。

「でも、秋の夕焼けは一番綺麗だと思います」

わたしもそう思いつて、相手の目を見て言いたいのに、彼の横顔だけを見てすぐにまた正面を向いて俯いた。

だから俯いたまま「はい」とだけ答えた。

「今日は、お出かけですか」

「はい、あの、美容院に行ってきました」

「言われてみれば……」

「あの、結構切ったんですけど」

「あ……すみません、鈍くて……」

「いえいえいえ、そんなつもりじゃ。あ、でもよく髪型違うのにわたしに気がつきましたね!？」

「あ、本当だ」

彼は「不思議だ」と呟くとすぐに「そういえば」と言って話題を変えた。

「みずほが、あいつが迷惑かけませんでしたか？」

「いえいえ、挨拶しただけです。みずほちゃん、ですか。本当に可愛くて……癒されました」

「あはは、癒しですか。でも結構やんちゃで手がかかりますよあいっ」

「よく遊ぶんですか？」

「休みの日だけですけど時々。今日は午前中はオママゴトに付き合
わされました」

思わずオママゴトというワードに笑ってしまった。

想像したら、可笑しかったから。

失礼だったかな。

「みずほはお母さんで、なぜか僕は飼い犬のポチだったんですよ」

「……はい？」

「普通オママゴトって言ったらお父さんとお母さんですよ？」

「そ、そうですね」

「お母さんと犬って。言葉を話すと「イヌはしゃべっちゃダメって」

……もう、何にも成り立たないじゃないですか。僕、吠えること
しかできないらしくて」

「あははっ」

「まあでもそこは、ポチになりきりましたよ。完璧だったと思いま
す」

「なんかちよっと、得意気な感じですね？」

「ははっ。意外とね、やってみると楽しかったりするんです」

少し俯きながら笑う彼の横顔は本当に心から楽しそうで見ている
だけでこちらまで幸せになるような、そんな笑顔だった。

「おにいちゃん、おなかすいた……」

砂場で遊んで砂だらけになったみずほちゃんが彼の前に立つ。

彼は「うわっ、またすごいことに」と言って手でみずほちゃんの
洋服の砂を払った。

「そろそろ帰るか」
「うん!!」

立ち上がる彼と、砂まみれのみずほちゃんの手がわたしの目の前で繋がれた。

「じゃあ、僕たちはこれで」

「あ、はい!!」

「まだ帰らないんですか?」

「もうちょっとだけ、ここにいます」

「そうですか」

俯いた顔を上げられなかった。

去っていく彼らの気配を感じたら、笑って見送ることが出来なかった。

行ってしまう。

あの日出会えたことは偶然だったとしても、
今日、ここで再会できたのは奇跡みたいなものだ。

今日を最後に二度ともう、会えないかもしれない。

いいのかな。

このまま別れて、いいのかな。

「まっ……、待って下さい!!」

夢中だった。

立ち上がると、去り行く二人の背中を追う様にして短い距離を走

った。

今までのわたしはまわりに手を引かれて、流されて、合コンに誘われれば行つて、男性を紹介してくれるって言ってくれる人がいて。

そこでいい出会いがあればいいなって、そう思っているだけで全部が他人任せだった。

本当は、本気で新たな恋をしようなんて思っていなかったのかも
しれない。

「あの……この間お借りした傘を返したいんです」

今まで生きてきた中で、一番の勇気を振り絞った瞬間だったかも
しれない。

「今度改めてもう一度、お会いできないでしょうか……？」

唇も声も震えて、目線は泳ぐようにして定まらなかった。

なんとか目線を上げ瞳を合わせると、彼は照れたように一度視線
をはずし、再びわたしを見た。

その優しい瞳にただわたしだけを映して、大きく一度だけ頷いた。

ほっとしたらなんだか胸にこみ上げてくるものを感じた。

瞳から溢れだしそうになるものを我慢するように唇を噛んで空を

見上げた。

夕焼け空にキラリと光る一番星を見つけた。

それはいつも見る一番星の輝きに比べて数倍も光輝いて見えた。

【光 - ひかり - 第二章 終】

第12話 恋心

あの日はわたしの大好きな青くて明るい快晴の空だった。

秋ももう終わると言うのに、昼間の陽の光の下はポカポカとしてとても暖かくて気持ちが良かった。

それなのに、わたしの胸は溢れだしそうな想いで胸がいっぱいに詰まって苦しかった。

息が苦しくてどうしたらいいのかわからなくて、とにかく俯いたら泣いてしまいそうだった。

空を見上げた。

昔から涙が出そうになった時は空を見上げた。

でも明るい太陽の光が眩しくて、細めた瞳の淵からこぼれ落ちる雫を抑えられなかった。

【 光 - ひかり - 第三章 なみだ 】

あの公園で再会したあの日、彼のことので知ることができたことと
言えば。

みずほちゃんっていう姪っ子がいるってことと、彼の名字が鈴村^{すずむら}
ってことだけだった。

思い切った行動に出た後、何もしゃべれなくなった私に彼が「僕は鈴村といます」と名乗ったんだ。

だからわたしも「秋元です」って、ううん、実際には「あつ、あ、あき、秋元です」だったかな……。

「土日休みですか？来週はお休みですか」という彼の問いかけに「予定ないです。暇です」と返答をした。

すると彼が場所や時間を提案してくれて、わたしはただ彼の言葉に「わかりました」と頷いて簡単に再会の日が決まった。

でも今度は偶然でも奇跡でもなくて、きちんと約束をして。

自分の部屋のクローゼットを開けてみた。

服だけは、選べるほどにたくさん持っていた。

毎月もらうお給料の使い道が他にあまりないから……。

ただ寒色系の同系色ばかりで、デザインもシンプルで似たものが多かった。

鏡に映る自分を見てみた。

肩につかない位置で切りそろえてもらった髪は、美容院に行った日はちゃんと内巻になっていたのに次の日にはフェイスラインの部分が見事に外側にハネていた。

片側だけではなくて、ついには両側とも。

自分が全体的に、総合的に見てイマイチなのは十分に分かっていた。

今までは鏡を見るたびにため息しか出なかった。

でも、今の鏡の中のわたしは頬が赤くなって顔色がとてもいい。唇の血色も良くて顔全体が明るく見える。

鏡の中の自分と目を合わせたら、自然と控えめでも頬が緩んだ。

ただもう一度会えることが嬉しかった。

ただそれだけのことがわたしに小さな変化を生んだ。

心の中に小さな明かりが灯ったようだった。

小さくても放つ輝きは力強く、発する熱はとてもあたたかい。

この気持ちは何なのか、本当は分かっていたけどまだもう少しだけ知らないフリをしていたい。

想いが叶う喜びを知らないわたしは悲しい現実しか知らなかったから。

だからもう少しだけ、あつたかくてくすぐったいこの気持ちにただ浮かれていた。

そう思ってたんだけどな。

約束の日は次の休日の土曜日だった。

早くその日になって欲しいような、しばらくはまだこの何とも言えない緊張感を味わっていたような複雑な気分だ。

でも憂鬱でしかなかった月曜日の朝の出勤が久々に良い気分を迎えられた。

会社のロッカーに着いて扉を開くと、定員は五名が限界の狭いロッカーは満員だったために扉を一旦閉めた。

しばらく外で待つと二人が出て、遅れてもう一人出てきた。

再びロッカーの扉を開けて中に入ると今ちようど着替えが終わったであろう山岸さんと、着替えている途中の大橋さんが同期同士で楽しそうにおしゃべりをしていた。

「おはよう」と声をかけると二人の挨拶が返ってきた。

「何話してたの？ 楽しい話？ わたしも混ぜてよ！」

「それがそうでもないんですよ？」

大橋さんが山岸さんの顔を伺うように覗きこむと山岸さんは「何！？」と少しだけ慌てた様子だった。

「山岸さん来月はせつかくの彼と過ごすはじめてのクリスマスなのに、彼、仕事が忙しくて会えないそうですよ？」

わたしが「それは仕方がないよね……」と言うと大橋さんは「仕方がないで済まさないください」と声を上げ、山岸さんは「あはは」と控えめに笑った。

何か、おかしいこと言っただかなわたし……。

「だってえ、少しの時間くらい取ってくれてもいいじゃないですか。クリスマスは一日だけだし！」

「イブもあるから二日あるよ？」

「そういう問題じゃないです……！」

わたしと大橋さんの会話に割って入るようにして山岸さんが「わたしは別にいいんです」と言っただ。

「あ……、二日とも会えないの？」

「……みたいです」

「そっか、忙しいんだね彼」

「あの、でもプレゼントだけでも渡そうと思って。彼も用意してくれるって」

「そっか、そうなんだあ！よかったね！……で、プレゼントは何にするか決めたの？」

山岸さんは「それが何をあげたらいいのかわからなくて……」と言っただ少し俯いた。

大橋さんが「そんなの何が欲しいか本人に聞くのが一番だよ」と

言うのに対して「なるほど」と思った。

でもこんな風にして悩めるのもきつとただけだし、わたしは無責任だったかもしれないけど「もうちょっとだけ考えてみたら？」と言ってみた。

「じゃあ秋元さんだったら何をあげるんですか？」

「えっわたし!？」

なぜか大橋さんからの質問にしばらく腕を組んで天井を仰いで考えてみた。

しばらくして出た結論は……

「彼は仕事が忙しいみたいだから……栄養ドリンク箱買いとか!」

大橋さんの「ドン引きです」の言葉で一瞬にして却下された。

……疲れた身体を癒す入浴剤にしなければよかったかな。そっだったかな。

「秋元さんの言う通りもうちょっとだけ、自分で考えてみます。頑張ります」

「なんかごめんね……言うだけで力になれなくて」

山岸さんは「いいえ」と明るい笑顔を見せると「お先に失礼します」と言ってロッカーを出て行った。

「クリスマス、か……」

思わず呟くようにして言葉を発した。

まだ先だけでもうそんな時期か、と思って。それだけだった。

自分には縁があるものだとは思えなかったから。

でも彼へのプレゼントに悩む山岸さんを見てたら頑張つて欲しいなつて思った。

……ちよつとだけ羨ましくも思った。

わたしも、彼女みたいに頑張れるかな。

——恋に。

嫌だな、こんな時にあの人の顔が浮かんでしまった。

やっぱりもう、この気持ちはごまかしようがない、知らないフリをするなんて無理みたい。

第13話 違う世界

大橋さんと二人きりになったロッカーに、「クリスマス、か……じゃないですよ！」と賑やかな大橋さんの声が響いた。

彼女はいつも朝から晩まで同じ高いテンションを保っていて彼女を見るとよく「若いな……」って納得してしまう。

そんな自分がおばちゃんみたいで少しだけ悲しい。

「クリスマスまであと一ヶ月なのにいいんですか？ 1人で寂しく過ごすクリスマスでも……」

「あー……、どうかな？ わたしは慣れてるから」

「胸張らないで下さーい。はあ……どこかにいい出会いが転がってないかな」

「大橋さんは友達も多いし出会いとかたくさんありそうに見えるけどな」

制服に着替えが済んだ大橋さんは「そうでもないんですよ」と言うと自分のロッカーの鍵を閉めた。

「秋元さんは……男友達いますか？」

「いるように見える？」

「正直見えないです」

「……」

一瞬止まった時間と気まずい空気をなんとか払拭しようと言葉を続けた。

「ど、どうして？ 男友達って何？」

「いや、だって。誰かいるんだったらその人からまた新たな出会い

へって友達の輪を広げていけるじゃないですか」

「たしかに……」

「で、いつか素敵な人に出会えたり」

大橋さんは「ま、わたしは男女の友情ってどうなのかなって思うから。だから意外にも男友達はあんまりいないんですよ」と言って笑った。

「もし、いい話あったらよろしくお願いします」

「いい話つてもしかして……」

「一回でいいから秋元さんに合コンに誘って欲しいな」

最後に「なんちゃって！」と明るく告げると大橋さんは「お先です」と言つてロッカーを出て行つた。

ロッカーに設置してある時計を見たら、始業時間に迫っていた。わたしも急いで制服に着替えてロッカーをあとにした。

そういえば、大橋さんには合コンに手を引いて連れて行ってもらつてばかりでわたしが彼女のためにしてあげられたこと一つもなかった。

それだけじゃない。

様々な情報に敏感な彼女に、新しくオープンしたテレビで話題になつてゐる飲食店に会社の子数人で連れて行つてもらつたこともあった。

彼女に新商品の化粧品のサンプルをもらい、使い心地がよくて今はその化粧品を使つたりもしている。

流行りに鈍感なわたしのわずかな情報源はすべて彼女だった。

もちろん話についていけないことも多々あるけれど、それでもいつもすべてにおいてタイプのまったく違うわたしにも慕つて親切にしてくれる。

悪いなって思うこともあったけど彼女はいつも「秋元さんにはいつも仕事にお世話になっているので」と言って笑った。

考えれば考えるほどに。

さつき秋元さんが「合コンに誘って欲しい」って言ったのは実は本心なんじゃないかな！？と思い始めてきた。

いや、というか。

当たり前の話だよね……。

本当に自分はダメな先輩だなんて思うと、ため息しか出なかった。

テンションがいつもに比べて若干高めだった朝に比べて帰りは少しだけ落ち込んでいた。

俯いて地面を見ながらいつもの通勤路を歩いている時だった。

手にしているバッグ中で携帯が振動した。

早瀬さんからの着信だった。

「もしもし？」

『あつ、心ちゃん。今いい？』

「はい。どうしたんですか？」

『あ、その前に本当にこの間はごめんね』

「もういいですって。本当に！」

当日は電話で、次の日はメールで彼から謝罪の言葉を受け取っていた。

腰は次の日には良くなったみたいで今日は普通に会社に出社すると言っていた。

「よかったですね、良くなって」

『でもまだ湿布は貼ってて……。今日とかさ周りから湿布臭いって言われてさ』

「あはは、それはちょっと酷いですね」

『だよーねー』

『ねえ今週平日暇な日ある？』

「だいたい暇ですけど」

『……』

電話の向こうで早瀬さんが笑っているのがわかる。

でも面白くて笑っていると言うより、苦笑いつて言うのかな……そんな気がする。

『この前のごめんなさいの意味も込めて何かおいしいもの食べに行こうよ』

「あ、はい。いいですよ」

早瀬さんに「誘つというアレだけど、どこかいいお店知ってる？」と聞かれて何も答えられなかった。

こんな時、大橋さんだったらいいお店たくさん知ってそうなんだけど。

そういえば大橋さんは男友達がどうか言っていた。

男女の友情は微妙だみたいなのも言っていたけど、それでも友達から出合いの場を広げて行ってその先に素敵な出合いがあるかもしれないとも言っていた。

「あの……」

『んー？なに？』

「あのー、わたしの会社の後輩も連れて行くとかありますか……？」
『え？』

「あ、あの！　すごく明るくて楽しくていい子なんです！　お店とかすごく詳しくて」

『うんうん』

話しているうちにとても失礼なことを言っているような気がしてきた。

いや、でも最初会おうって話した時も誰か他の人誘ってもいいよ、みたいなこと言ってたし……。

さすがに今「合コンしましょう！」とは言えないけど、ご飯くらいなら……。

相手の反応を伺うようにして話をしていると早瀬さんが「いいね！　それ！」と言って、乗って来た。

「ほ、ほんとですか！」

『うんうん！　もちろん、その後輩の子って女の子だよね？』

「当たり前じゃないですか！」

『男連れてきたらびつくりするよね』

「さすがにないですよ、それは！」

少しの緊張から一変して笑いがもれた。

すると早瀬さんが「じゃあ俺も適当に誰か暇そうな奴連れていくよー」と言った。

暇そうな人ですか、と呟くと「うん、同僚」とも。

こついつのって何て言うんだろう。

少人数の合コン？

合コンなんて呼べるものでもないかな……。

でも、よかった。

大橋さん、喜んでくれるかな。

『実は俺加奈からさ』

早瀬さんの口から加奈さんの名前が出て、ゆっくりと歩いていた足が一瞬止まった。

『心ちゃんをもっと外に連れ出してくれってお願いされたんだ』

「連れ出す？」

『引きこもりなんだって？』

「まあ、……そうですね。どちらかと言えば」

『大袈裟なこと言うけどさ、一度きりの人生なんだからもっと色々な人に出会って楽しもうね！』

早瀬さんの言葉に思わず今日一日の中で一番の大きな声で「はい！」と答えていた。

どうしてわたしは友人がみんな結婚してしまっただけで自分は一人ぼっちなんだって思ったりしたのかな。

ちゃんとまわりを見渡せば麻衣子も大橋さんや、加奈さんだって、出会ったばかりの早瀬さんだって。

自分を応援してくれる人はいるのに。

わたしは自ら目を閉じて殻に閉じこもって「どうせ自分なんか」っていつも最初から諦めていた。

ちょっと頑張った結果が出なければ「やっぱりね」って諦めてばかりだった。

出会いも、恋愛も、その先の幸せも全部。

世界が変わったみたいだった。

あの日からかな、変わったのは。

わたしの心の中に小さくて儚いけど、優しくて穏やかな光が灯ったあの人との出会いの日。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1203y/>

光 -ひかり-

2011年11月24日22時49分発行